

J S A

北海道支部ニュース  
( No. 327 )

日本科学者会議北海道支部

事務局 〒 001-0022

札幌市北区北 22条西 2 丁目 1-2  
静麗荘 32号室

振替 02740-1-6811

TEL/FAX (011) 707-2299

Eメール jsa-hokkaido@mc6.sings.jp

北海道支部 ホームページ: <http://www.jsa.gr.jp/hokkaido/>

JSA本部 ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp>

新入学生院生歓迎講演会	1
2011年度 JSA 支部大会のお知らせ	2
2011年度支部大会議案	2
科学談話室 (齋藤貴之)	6

# 新入院生学生歓迎講演会

## 岐路に立つ大学—科学と社会—

講師：福地 保馬 氏  
(北海道大学名誉教授・科学者会議北海道支部代表幹事)

日 時 5月12日(木) 18時30分から

会 場 北海道大学百年記念会館大会議室  
(北区北9条西6丁目)

参加費 無料

主 催 科学者会議北大分会

福地さんは、北海道大学医学部を卒業され、公衆衛生学を専門とし、労働衛生学や環境衛生学の立場から、公害問題、空気汚染による健康問題、など幅広い問題を取りあげ活躍されて来ております。東北大震災や福島原発問題が大きく注目される中、あらためて専門と社会との関係をとらえかえす良い機会となるとおもいますのでご参加をお願いします。

## 2011年度 JSA 支部大会のお知らせ

2011年度北海道支部大会を下記の通り開催します。代議員の方はご出席ください。代議員が出席出来ない場合は、委任状を必ず提出してください。

代議員以外の会員の方々も積極的にご参加していただき、ご意見等をお聞かせ下さい。

### 記

日時： 2011年5月15日（日）9：30～14：00

場所： 北大工学部社会工学系第2会議室 A151（工学部正面玄関入り1階左手奥）

報告及び議題：

1. '10年度支部・班・委員会等活動報告
2. '10年度会計報告、監査報告
3. '11年度支部活動方針案及び予算案
4. 支部役員及び全国大会代議員選出
5. 全国大会議案意見交換
6. その他

## 2011年度支部大会議案

### — 2010年度活動報告—

#### 1. 地域や道民生活に密着した課題

##### (1) シンポジウムなどの開催

2010年度の北海道科学シンポジウムは、2010年10月30日（土）に北海道大学文系総合教育研究棟で開催された。今年度も昨年度に引き続き、午前是一般研究発表、午後は市民公開シンポジウムが行われた。一般研究発表は、一般5件であったが、若手からの発表はなかった。市民公開シンポジウムは「宮崎県・口蹄疫一対応と課題から」をテーマとして、コーディネーターを中原准一常任幹事がつとめ、報告Ⅰとして高橋 俊彦（釧路地区NOSAI西部事業センター センター長）氏が「主要酪農地帯の獣医師として口蹄疫を考える—宮崎口蹄疫の現地対策から見えたもの—」を、報告Ⅱとして永幡 肇（酪農学園大学獣医学部教授）氏が「現地、宮崎県で口蹄疫防疫に携わって」が行われ、活発な議論が行われた。参加者は午前・午後あわせて29名であった。

##### (2) 委員会、研究会などの活動

・災害問題研究会は、東日本大震災に関する情報交換会を2回開催した。これには、常任幹事も参加した。

・原発問題研究委員会、公害問題研究委員会及び千歳川治水問題研究委員会は、組織的な活動は行わなかった。各委員会等のあり方に付いて常任幹事会で検討した。

- ・地球温暖化問題勉強会は、例会を頻繁に開き勉強を行っている。
- ・個人会員の交流を行っている第3水曜の会は、毎月例会を開き活発な活動が行っており、会のニューズレターを毎月発行し、個人会員及び各班に送付している。
- ・大規模風力発電問題研究会は、2010年度支部大会で設置が了承され、ほぼ毎月研究会が開かれた。研究会会員は、研究成果を北海道科学シンポジウムの「一般研究発表」や18総学分科会で発表を行った。

### (3) 新入院生歓迎講演会

2011年5月12日(木)北海道大学百年記念会館で、福地保馬氏(北海道大学名誉教授・北海道支部代表幹事)に講演していただいた。テーマは、昨年の講演者(池内了氏)のそれを受けて、「岐路に立つ大学—科学と社会」で行ってもらった。主催は、北大分会で行い、北大生協に後援していただいた。

## 2. 平和と民主主義、科学者の権利の問題

支部として、この問題に取り組むことは出来なかった。

## 3. 全国企画への参加

- ・18総学(11月20-21日・於宮城)に、3件の発表が行われた。「大規模風力発電事業推進の陰で一『健康被害者と自然環境の切り捨て』の実態と構造一」(後藤美智子会員)、「退職個人会員を組織して20年の活動報告」(高畑滋会員)、「北海道のダム事業の検証とダムの遡河性魚類への影響」(佐々木克之会員)である。
- ・原水禁・科学者集会、全国夏の学校は、院生などに参加を呼びかけたが、今年度も支部からの参加者はいなかった。

## 4. 組織強化・財政活動

- ・支部幹事会は2回開催した。第1回(5/16)は支部大会に引き続き行い、代表幹事に福地保馬及び山田定市の両氏を、支部常任幹事に9名を選出した。第2回(11/7)は、北海道科学シンポジウム、2010年度後半の活動計画、組織強化・会員拡大について討議した。他に大規模風力発電問題研究会の担当者より活動状況の報告がされた。
- ・常任幹事会は前半は毎月第2木曜日に、後半は第1木曜日に開いた。事務局は、会誌等の発送作業にあわせ必要な場合、簡単な打ち合わせを行った。
- ・会員増は\_\_名(そのうち転入\_\_名)、減は\_\_名(退会\_\_名のうち退職が\_\_名、死去が\_\_名、転出\_\_名)であった(4月30日現在の人数を、大会当日報告予定)。
- ・支部ニュースは、8回(No.320-327)発行した。
- ・支部のメーリングリスト(約80名登録)で会員に行事案内などを流した。支部ホームページは、支部ニュース発行や行事にあわせて更新を行った。
- ・滞納解消に向けて、長期未納者への会誌配付停止を2名について実施した。その後会費は納入されていない。
- ・特別会費は新たな適用者はいなかった。年度途中で1名が特別会費に戻った。
- ・会費の滞納解消をめざしたが、全国には\_\_月分までの納入で\_\_ヶ月の滞納となった(4月30日現在の状況を、大会当日報告予定)。
- ・郵便局の会費自動振り込み制度は、新たな利用者はいなかった。(現在約60名が利用)。

## — 2011 年度活動方針（案） —

### 1. 地域や道民生活に密着した課題に積極的に取り組み、その活動成果を地域・職場に還元する

(1) 北海道科学シンポジウムをはじめ、研究成果の報告や交流を行う各種のシンポジウム・講演会を開き、それらの成果を印刷・刊行して普及を図る。

・シンポジウムは、会員の研究活動、支部の研究委員会・研究会等の活動を広く発表・交流する場とする。特に院生会員の発表を重視する。

・科学シンポの開催時期は、会員が研究発表を予定しやすいよう、毎年10～11月に固定化していくこととする。

・本年度の北海道科学シンポジウムは、10月下旬または11月上旬の土曜日、札幌で開催する。公開シンポジウムのテーマは、東日本大震災問題あるいはT P P（環太平洋連携協定）問題とする。

(2) 3月に起こった東日本大震災は、日本社会に様々な問題をなげかけた。この問題について支部として今後の学問・科学・社会のあり方を含めて研究を行う。

(3) 諸課題の委員会、研究会活動を進めるため、多くの会員の参加を呼びかけるとともに会員は積極的にこれらの活動に参加する。

・公害環境問題研究委員会、原発問題研究委員会については、現在十分な活動ができていない現状を踏まえ、そのあり方、体制について再編も含めて検討する。千歳川治水問題検討委員会については、引き続きそのあり方、体制について検討する。

・災害問題研究会については、会のメンバーで検討してもらう事とする。

・地球温暖化問題勉強会は、2011年度も継続する。

・2010年度に設置した「大規模風力発電問題研究会」は、2011年度も継続する。

(4) 科学・技術政策についての情報を集め、それについての評価検討の機会をつくる。

大学問題研究ワーキンググループにおいて、ひきつづき大学問題について研究をすすめる。

今の政府の科学・技術政策について、全国の委員会と連携して取り組む事を検討する。

(5) 新入学生院生歓迎講演会を開催する。

(6) 新入学生院生歓迎講演会の実績を踏まえて、支部創立40周年記念「シリーズ講座」の内容について、多くの若手研究者が参加するよう、院生会員の意見を聞き、実行委員会等で検討する。

(7) 市民講座の開催について検討する。

(8) 市民とともに世界および日本国内のエネルギーと環境に関する諸問題を学習・検討し、日本のエネルギー・環境政策について提言することを目指した活動を行う。

(9) 地域や道民生活に密着した課題の解決をはかるため、道内の諸団体との共同活動をすすめる。

(10) 原発問題住民運動全国連絡センターが主催する全国交流集会（今年の秋に北海道で開催）に支部として取り組む。

### 2. 平和と民主主義、科学者の権利を守る運動を積極的に展開する

(1) 平和を守る科学者としての自覚を高める運動および平和憲法擁護の運動を進める。

支部としては、全国の方針提起を受けて、具体的な企画を検討する。

(2) 世界のすべての国から核兵器を廃棄する事を願い、わが国に非核の政府を樹立するよう努力する。

(3) 大学・試験研究機関における研究者の地位と権利を擁護するための運動を進める。

### 3. 全国企画への参加を積極的に行い、他支部との交流を進める

(1) 原水禁・科学者集会および「夏の学校」に向けて、参加者を早めに決定し参加補助カンパを募る。

(2) 第19回総合学術研究集会（19 総学、2012 年秋、岡山で開催）に積極的に取り組む。

(3) 全国の研究委員会等への積極的な参加、連携を行う。支部会員が委員に応募することを積極的にすすめる。

### 4. 班、分会を中心に、活発な活動を行い、個人会員の活動を含めて支部活動を盛りあげる

(1) 班・分会の世話人体制を確立し、大会・幹事会への参加をすすめる。

(2) 「第三水曜の会」など、個人会員の集まり・交流を活発に行う。

(3) 常任幹事は、地方を訪問する機会がある際は、班、分会を訪問し、意見の交換を行い、支部及びそれらの班・分会の活動にプラスするよう努力する。

(4) 大会、幹事会の際は、会員研究談話会を開く、もしくは班・職場の状況報告を行うようにする。

### 5. 会の拡大に一層努力し、組織を強化する

(1) 現在会員のいない（あるいは少ない）大学・研究機関、若手層、職層などに目を広げ、これらの中に活動を広めるよう工夫し、会の拡大につなげるよう努める。

(2) 支部行事や班活動の中で意識的に会への加入促進に取り組む。学生などに「日本の科学者」の読者の勧誘をすすめる。また、全国の会員拡大運動の提案を積極的に受け止め支部としても推進する。

(3) 若手会員の活動の活発化と加入促進を計り、院生・若手研究者との接触を広げ、成長を助けることに格段の努力を払う。また、院生協議会との協議・連携について検討する。

(4) 支部ニュースは出来るだけ毎月発行し、全会員に速やかに配付する。支部の行事ばかりでなく、全国規模・北海道各地域の各種の催しや刊行物の案内など、できるだけ多くの情報を支部ニュースに載せる。このため各地からの情報提供をお願いする。

(5) 幹事会は年2回（支部大会直後、9-11月）開催する。

(6) 支部ホームページについては、適宜更新をはかる。

(7) メールによる会員への情報発信を強める。

### 6. 財政活動を強化する

(1) 会費自動振り込み制度について、さらに多くの会員の利用を促進する。

(2) 会員にできるだけ会費前納をお願いし、支部財政の安定化に努める。

(3) シンポジウムなどの事業による収入増をめざす。

(4) 全国で行っている「会員5000名の早期回復をめざすJSA活動活性化募金」について、支部としても積極的に取り組む。

## 北海道の「絶滅危惧種」(！？)の調査研究

北海道大学総合博物館 齋藤 貴之

私の調査対象は、「絶滅危惧種」です。北海道の開拓や人びとの暮らしと深い関わりを持ってきたにもかかわらず、その生態はあまりよく知られていません。しかし、少し前までは北海道全域で見ることができたにもかかわらず、今ではすっかり数を減らし、ほとんど姿を見ることができなくなりました。とはいっても、残念ながら、「レッドデータブック」のどこを探してもその名前を見つけることはできません。なぜなら、私の調査対象は、“トンテンカンテン”の「鍛冶屋」さんだからです。

北海道の鍛冶屋は、道内の産業を支えてきた多様な道具類、鋏やプラウ、ハローといった農具、鉋やサツテ、トビといった林業用具、そして、アンカーやタモ、カギといった漁具、などのさまざまな鉄製品の生産者あるいは改良・開発者として、北海道の開拓、および農林水産業の発達において重要な役割を担ってきました。ところが、近代化に伴うさまざまな変化により、その存在価値は急激に薄れ、現在では「今でも鍛冶屋というものは存在するのか」という疑問を抱かせるほど数を減らしています。しかし、現在でも確かに北海道の鍛冶屋は存在し、人びとの暮らしの中に生き続けています。現在を生きる鍛冶屋を探し、それぞれの鍛冶屋の歴史や現状について調査し、これまでどのように生き残ってきたのかを探り、それを手がかりに今後の鍛冶屋の生き残る術を模索し、提示する、というのが私の調査研究です。

「絶滅危惧種」と同じように、一度途絶えてしまうと、もう二度と取り戻すことはできません。もうすでに遅すぎる状況かもしれませんが、できるだけ多くの鍛冶屋を見つけ出してお話を伺い、その経緯と経験を記録したいと考えています。他の生物種とは違い、話ができるという点では苦労は少ないですが、数軒の鍛冶屋を記録しただけでは、「北海道の鍛冶屋」を把握したことにはならないという点では大変です。そして、こうした「絶滅危惧種」は、鍛冶屋などの伝統的な職人ばかりではなく、皆さんの近くにも数多く存在しています(旋盤工、菓子屋、活版印刷屋など)。もし、身の回りでこうした「絶滅危惧種」を見つけたら、少しでもよいのでぜひ記録しておいてください。20年後、30年後の後輩たちが、それらについて少しでも多くの情報を手に入れられるように。